

僕は、夢を見ていた。

小さい弟の京太を連れて、僕は、京都駅の前のデパートの地下の食料品売り場の中を歩いていた。果物や漬物などいろいろな店があり、人がいっぱいだった。いろんな試食コーナーがあり、僕はそれを一つ一つ試食していた。京太も僕の真似をして、いろいろ物色した。「兄ちゃん、あれうまかった。もっかい、行こう。」と僕の手を引っ張る。京太に引かれて、その乾物屋の前に来て、でっかい金時豆がもってあるのを、まわりを確かめて、手つかみで試食した。たくさん、もぐもぐ食べて、店のものに見つかるといかなと思ひ、急いで、その場を立ち去ろうとして、振り向くと、背のでっかい金髪のご婦人が見えていて、その人にもろに僕はぶつかった。僕が見上げると、そのご婦人は笑っていて、僕に、何か、話しかけた。コケコッコ、コケコッコと話しかけた。僕は意味がわからなかったが、なんかの挨拶だと思ひ、ハローと答えた。すると、そのご婦人は、大きな目を輝かせ、機関銃の様に、鼻にかかった、甲高い声で、コケコッコを何度も繰り返しているような調子で、どんどん喋った。京太は異常を感じて、「兄ちゃん、逃げよう」と言った。僕も逃げようかと思つたが、そのご婦人の表情は、僕等を吐いている様子ではなく、ニコニコ顔に近々と感じた。そして、僕はどう思つたのか、とっさに、ニタツとして、そばのお菓子屋の方を向いて、「チョココレート」とつぶやいた。すると、意味がわかったのか、そのご婦人は僕の手を取り、そのお菓子屋の前に連れて行き、大きなチョココレートを二枚買って、僕と京太にくれた。僕と京太のうれしそうな顔を見て、ご婦人は、満足なご婦人の後姿を目で追つた。僕と京太は、その不思議な

やっぱり駄目だ